未整備と非常に限定された調査のもと，樹立された議論であり，もうそろそろ考え直す時期にきているように思われる。照葉樹林文化論の弱い点は，観察資料から一気に日本人のルーツにまで遡ってしまう性急さであり，一般に近代史的視点に欠ける点である。近代といっても，中国の研究者にとっては文化大革命の影響が大きく，大きく「解放前」「解放後」という時代区分をしがちである。問題はそれ以前にもあり，特に民国期，清末の歴史が掘り起こされるべきである。

また，比較ということでいえば雲南省の研究者は中国語プロパーのため，北タイの調査報告を鑑みない傾向がある。同じ民族の研究は北タイでは英語でいくらもでており，もはや民族誌的研究は飽和状態にあるといっても過言ではない。北タイでは十分調査され尽くされている民族が，雲南に入ると謎の民族になってしまうのは実に不思議なことである。また，焼畑の研究についても日本やネパールの例をだす前に北タイの比較研究をされることを望む。

全体を通じて経済の事例が多いことは評価できる。特に生産の合作化から生産責任制への転換期の経済変動が具体的な数字を挙げて詳解されていることは評価できる。統計的な処理ができるほどではないが，評者がフィールド・ワークを行なった1980年代後半ではまだ文化大革命の余韻があり，「経済」という漢語を持ち出すと（地主の経済調査と放逐が行なわれたため）誰もが口をつぐんでしまう有様であったことを考えると，対外開放政策の雰囲気が伝わってくる。

（A４版　463頁　1994年　慶友社）

秋道智彌編著
『イルカとナマコの海人たち』

安室　知※

一見，本書のタイトルからは，統一性のない雑多な論稿の集まりを思い浮かべるが，実際に読んでみると本書を貫く一筋の問題意識があることが理解される。その問題意識がまた本書の最大の面白みでもある。

その問題意識とは，編者である秋道智彌の「熱帯の海で，いまなにがおこっているか」という問い掛けそのものである。

かつて民俗学の研究者はこうした，今起こっていること，現実に住民が直面していることにどれだけ関心を払ってきたであろうか。おそらくそうした現実問題を調査の目的として被調査者に対することはなかったのではなかろうか。民俗学者の関心の多くは過去へ向かう。在るものと信じる民俗伝承の祖型や起源は民俗学者の歴史性に関する奇形的関心事である。我々民俗学者は現実の人を前にしてその人の話を聞きながら，その関心の耳目は現実の人を通り越し過去へ過去へと遡る。

民俗調査のとき，被調査者がそのとき最も関心のあること気に掛かっていることを一生懸命に調査者に伝えようとする場面に出会うことは稀ではなかろう。それは民俗の祖型を追求する調査目的からすれば常に，雑談として聞き流されることであり，できればそんなことは聞きたくない時間の無駄とされてきたことである。表情には出さなくても，そうした話に適当に相槌を打ちながら，なんとか話を本筋（調査者側の意図したこと）に戻したいと考える。そんな経験が少なからず民俗学者にはあるのではなかろうか。

実はそうして無視し捨て去ってきた話の中にも民俗学が対象とすべき問題がかなりあったような気がする。調査時に無駄とされる話

※横須賀市立人文・自然博物館学芸員

は，たとえば，海や川の汚れのことであったり，東京へ出ていった息子のことであったり，また戦争当時の苦労話であったりと，その内容は種々雑多である。しかし，その中には広義の環境問題として捉えられるものが多く含まれていることに気づかなくてはならない。生活者が現実問題をきっかけとして捉えた環境である。鳥越皓之とともに生活環境主義を唱える嘉田由紀子は，当事者としての環境の意味が自己発見され，それが伝承されていかない限り，社会に流通する環境は「奇麗で」「清潔で」「美しい」という言葉で表現されるだけの薄っぺらなものになっていくことを，ある家に残された五右衛門ブロにまつわる伝承の中から示した（嘉田，1994）。そうした視点を持つことによってはじめて民俗学が環境問題という現実に結びつけられるのであろう。

そうした現実問題に積極的にかかわる研究のおもしろさを本書は熱帯の海を舞台にして教えてくれる。それは何も，研究対象としてのおもしろさばかりをいうのではない。現実問題を被調査者と共有することの大切さである。それはともに怒ることであったり，失望することであったり，自分の無力を思い知らされることでもある。本書の中にはそうした話者と共に現実問題を共有し，熱帯の海に暮らす人々がこれからどう活きていくべきなのかを積極的に考えようとする姿勢がある。それだからこそ，住民の現実的姿を目の当たりにして，調査者が失望したり悲観的になったりする資格があるのではなかろうか。

秋道は，ソロモン諸島のマライタ島を20年ぶりに訪れ，かつて海に対する豊かな民俗知識を持ちそれを使って巧みな追い込み魚を行っていた島の人々が，外部経済に巻き込まれ，ドラム缶でせっせとナマコを茹でている姿に大きな失望感を抱く。また，マレー半島の先住民族オラン・アスリを調査した口蔵は，現在伐採や開発で破壊の進む熱帯雨林の中で暮らすオラン・アスリに再会したとき，10年前と同じように屈託のない笑顔をみせる彼らの姿に大きな不安を抱かざるをえなかった。

こうした現実問題の扱い方に，民俗学と人類学との大きな違いを見たような気がする。私が分担執筆者の一人である竹川と偶然交わした会話の中で，そうした民俗学と人類学の視点の違いを感じたことがあった。民俗学に身を置く私は，いわば習い性として過去への眼差しを身につけており，姿を消しつつある技術や習俗を聞き書きで復元しようと試みてきた。多かれ少なかれそうした復元作業は民俗学者の共通することである。それが時として古代や中世といった被調査者の体験しない世界までへも遡っては虚構を作り出してしまうことには大きな疑問をもつが。今消え去ろうとしているからこそ，それは調査対象として貴重であると民俗学では一般に考えられている。そんな話を私がすると竹川はまったく反対のことをいう。竹川の弁によれば，学生時代の指導者は竹川がかつて盛んに行われたが今はほとんど見ることのできない沖縄の伝統漁撈を調査対象にしようとしたとき，なぜそうした今にも姿を消そうとしている過去のことを取り上げるのかといって研究テーマの変更を指示したという。現在活き活きと行われているからこそ調査対象としても重要なことであり，またおもしろいのだというのであろう。

私は民俗学の立場から漁撈や農耕について調査を行ってきたが，現実問題へ積極的にアプローチする人類学のあり方には大きな共感を持っている。篠原徹は近過去50年（被調査者が現在でも行っていることや体験としたこと，いまでも体に備えた技能や自然知）を民俗学は対象とすべきであると主張する（篠原，1994）。そうした研究態度は，過去へと遡ることを当然とする民俗学への痛烈な批判であると受け止めなくてはいけない。また，それは同時に秋道の問いかける「熱帯の海で，いまなにがおこっているのか」という問題意識に

も通じるもので，それが実は民俗学の研究対象としても立派に通用するものであることを教えてくれる。

本書の内容について，いくつか問題となりそうなことを上げてみよう。

本書の中では，いくつかの注目すべき提言がなされている。そのひとつが，エスノ・ネットワークである。

エスノ・ネットワークに関連して，各分担執筆者の共通関心事として指摘されるものに貨幣経済の与える影響についてがある。ソロモン諸島マライタ島を調査した後藤は，伝統的な貝貨製作と近年とみに進行した貨幣経済との関わりに注目し，金では買えない貝貨の存在を発見し安堵を覚えている。また，，パプアニューギニアの社会変化をナマコ漁を通して調査した須田は，未開社会の社会変化が開発や貨幣経済の浸透といった外部要因のみによって引き起こされたと考えることに対して，「その渦中にいる人々の役割をあまりに軽視した結論」であることを明らかにしている。秋道がいうように，たとえどんな民族社会においても現代においてはまったく外界から隔絶され何の商業性も持たない経済活動はありえないのである。そうしたとき，エスノ・ネットワークは大きな意味を持ってくる。

個人やある集団の行動様式を理解するための分析概念として，ネットワーク理論は社会学や社会人類学においては古くから用いられてきた。たとえば，社会現象を分析する方法のひとつとしてソーシャル・ネットワークの考え方は広く知られるところである。それでは，ここでとくにエスノ・ネットワークの言葉を用いて，秋道は何を目論んだかといえば，それはつまるところ水産資源利用の動的な理解である。

それは，さまざまなレベルの人間集団の水産物をめぐる関係をみることにより，商品経済・貨幣経済の流れも取り込んでより包括的に人と環境（とくに海）との関係性を理解するためのものであると考えられる。本書の中で，こうしたエスノ・ネットワークによる水産物の流通の問題は，各執筆者に共通する課題であり，それぞれに興味深い成果が報告されている。

そうした個々の事例を検討し，自給漁撈と商業漁撈とは互いに対立するだけの概念ではなく，相互に性格を変えうる潜在的可能性を持っていることを明らかにしたことは重要である。秋道もいうように，自給的漁撈がいつも資源保全的であるとは限らないし，また商業的漁撈がすべて乱獲を伴うような環境破壊的活動とはいいきれない。

ただし，そうした個々のエスノ・ネットワークの事例を，秋道は①漁撈民と農耕民の共生的ネットワークと②鎖状ネットワークと呼ぶ２類型にパターン化して理解しようとした。おそらくこの２類型のみを秋道は想定しているわけではなかろうが，ネットワーク理論にありがちなパターン化の落とし穴がそこに見えてくる。

パターン①についていえば，たびたび秋道自身も指摘するのだが東南アジア，オセアニア地域にみられるような多様な社会に暮らし多様な生計活動を行う人々を，農耕民と漁撈民というカテゴリーの中に押し込めてその間での関係性にひとつのパターンを想定してしまってよいものであろうか。

また，②の類型としてあげる鎖状ネットワークはその内包する問題の多様さゆえにひとつの類型とすることはほとんど意味をなさないのではないかと感じる。多様な生計上の位置にある人々が，しかも商業性にまったく関わりのない生活などありえないとき，生産がすぐ次の段階には消費につながっているような漁撈民と農耕民との共生的なエスノ・ネットワークというのは，現状ではむしろ例外的なものであり，「熱帯の海で，いまなにがおこっているのか」という問題意識を大切にするなら，分析し類型化を行うべきは秋道が鎖状ネットワークと一括してしまったところの内部にこそあるのではないか。

あえていうなら，生計維持の上で多様な位

相にあり，またそのなかでもさらに多様な流通の関係性の中に活きる人々のエスノ・ネットワークのあり方を理解しようとするとき，私はあえてパターン化の必要を感じない。それほど本書に取り上げられたデータは多様で興味深いものばかりである。

本書のデータは，資源生物学的な定量的な情報とともに生態人類学的な参与・観察調査によって得た情報が基本となっている。私からすれば，資源生物学的な定量調査のデータはあくまでも基礎的な作業であり，むしろ定性的な情報を多く含む生態人類学的なデータこそが本書の目的には不可欠であると考える。そうしたことでいえば，本書の表題にもなっているイルカを扱った竹川の論稿とナマコを扱った須田の論稿は最も興味深くおもしろいものであった。

そうした中で，資源生物学に基礎を置いたいくつかの論稿は，総じて人への関心が薄く感じられた。たとえば，第5章では底引網による乱獲の危機と銘打った論稿は，その基礎データは，「通常は一晩で2回網を入れるところを，調査の都合により3回にしてもらい，沖合い4・6・8キロメートルのところを引いてもらった」ものである。こうした調査データは，明らかに他の生態人類学的論稿とは異質なものである。当然，こうした調査から得られてくるデータは資源生物学的には充分に意味があることではあろうが，エスノ・ネットワークの中に活きる人々への関心からは遠く，そうしたところに面白みを感じて読む目からは退屈な文章になっていた。

しかし，全体的には，ともすると定量データが並び堅苦しくなりがちな生態人類学の論稿を，平易な文章のもと，読み物として分かりやすいかたちで提示している。それは冒頭示したように，「熱帯の海で，いまなにがおこっているのか」という問題意識が，編者である秋道のみならず各分担執筆者に一貫して流れているからにほかならない。評者として一読を勧めたい（NHKブックスに納められているため安価で入手しやすい）。

なお，最後になったが，本書の構成を紹介しておこう。本書は，3部構成になっている。第1部では，秋道が「東南アジア・オセアニアの水産資源とエスノネットワーク」と題して本書全体の狙いを水先案内人的に述べている。第2部・3部は，それぞれ分担執筆者が全体の方針と各人の問題意識とによって書き下ろした論稿である。第2部の「変わりゆく漁民の暮らし」は，おもに生態人類学的な関心と手法により記述されたもので，「熱帯雨林の中の漁撈―マレー半島」（口蔵幸雄），「イルカが来る村―ソロモン諸島」（竹川大介），「貝貨を作る人々―ソロモン諸島マライタ島」（後藤明），「ナマコとキワイ社会のゆらぎ―パプアニューギニア・マワタ村」（須田一弘）の各論稿がある。そして，第3部は「共有の悲劇を繰り返さないために」と題し，生態人類学的な関心のもと資源生物学的な側面をより強くだした論稿が並ぶ。「底曳網漁業による乱獲の危機―タイ・シャム湾」（望月賢二），「マングローブ域の小規模漁業―マレー半島」（後藤明），「華人漁民の世界―マレー半島」（田和正孝），「サンゴ礁の貝類資源―トンガ・キリバス」（山口正士）の各論稿である。

この文章は，本書を一読した後，民俗学に身を置く自分自身の関心に引きつけて，その感想を述べたにすぎない。本書自体の持つ人類学的な側面（または資源生物学的側面）の論評には至っていないことを最後に述べておく。

〈参考文献〉

- 嘉田由紀子　1994　「水と生活の民俗伝承」，『試みとしての環境民俗学』，雄山閣出版

- 篠原　徹，1994，「環境民俗学の可能性」，『日本民俗学』200号